

令和4年度第2回 尼崎市文化ビジョン会議 議事録(要旨)

日時	8月30日(火) 13:30~15:30
場所	小田南生涯学習プラザ 近松門左衛門
委員	上野委員、大永委員、大橋委員、坂上委員、武元委員、原委員、古川委員、善見委員 ※欠席:福田委員
アドバイザー	尼崎市顧問
事務局	文化・人権担当部長、文化振興課長、文化振興課職員3人
オブザーバー	(公財)尼崎市文化振興財団 常務理事、事務局長

1 開会

(事務局)

(会議運営について)

- ① 傍聴:希望者には傍聴を認める。市のHPで告知する。(本日は0人)
- ② 会議記録:録音に基づき議事録案を作成し、委員確認後に確定する予定。
- ③ 配布資料の確認。資料1・2については当日版に差し替え。資料4は当日配布。

2 「文化に関する市民意識調査」結果について

(コーディネーター)

議事に入る。

本日は、文化に関する市民意識調査を実施した結果の確認、前回会議で生涯学習プラザについて意見をいただいたので文化事業の地域展開状況等の確認、その上で文化ビジョンの改定イメージについて意見交換を行いたい。事務局より説明を。

(事務局)

(資料説明)

- ・資料1 第1回尼崎市文化ビジョン会議委員発言と改定の視点
- ・資料2 文化に関する市民意識調査結果について

(コーディネーター)

資料1、2について、委員の皆さんよりご質問やご意見を。(着席順で)

(委員)

市民意識調査結果中、「市・文化振興財団の事業に対する興味の有無や意義深いと感じているかは全体的に低調」というのは残念。市民は文化に親しむことを重要視しており、事業主催が市か財団かは意識していない印象があるが、黒子に徹するとしたらその方がいい。

文化振興の実績や評価に関係してくるが、市や財団はアンケート結果を真摯に受け止めている

と思う。

(委員)

市民意識調査の「子どもが文化・芸術に親しむために重要なこと」の中で、学校や園での鑑賞・創作体験の充実が挙げられている。前回は紹介したが、ピッコロシアターで行っている中学生対象の鑑賞事業はぜひ市内でも周知していただき、活用いただきたい。

社会包摂では、前回、不登校の方や障がい者の方について意見があったが、その他にも外国人の方はどうしているのか、というのが気になる。ピッコロシアターでは、加東市や小野市で、在留外国人と日本人で簡単な日本語を使った演劇ワークショップを通じた交流をしている。尼崎市には1万人以上の外国人が居住しているということなので、同様の取り組みも考えられる。そういった社会包摂の事業も、ビジョンに取り込んでいけたら嬉しい。

(コーディネーター)

調査結果で外国人という回答を分類したものはあるか。

(事務局)

外国人ということが分かる質問をしていない。

(委員)

回答者の世代、シニア世代、子育て世代、若い 20～30 代で回答に違いがあると思う。子どもたちの文化体験では、触れる・鑑賞する部分と、実際のプレイ、演奏・演じる部分があるので、そういったところがわかる質問が今後あってもいいかなと思う。

また、音楽、演劇、ビジュアルアートなど芸術分野だけでなく、国語や英語、社会なども今後は総合的に見ていくことも必要だと思うので、次に調査がある時には市民がどういうものを求めているのか、関心の部分も調査できるとよいと思う。

(コーディネーター)

尼崎の小学校では、地域を学ぶ時間はあるか。

(事務局)

小学4年生で「私たちのあまがさき」(通称:わたあま)という授業があり、現在コロナで休止しているが、歴史博物館へ社会見学に行くという取り組みもある。

(委員)

アンケートを見て驚いたのは、「子どもが文化・芸術に親しむために重要なこと」について、学校や園での体験が上位に来ている点。それだと生活の差によって参加ができなかったりするので、生涯学習プラザなどオープンに行ける場所で、無料開放だったり、子どもたちが気軽に参加できる機会があればいいなと思った。

「尼崎の文化の特徴」で挙がっている近松門左衛門は、自分の中では入っていない。音楽は難しいのでは、という先入観を取り払い、子ども向けにやれば面白いと思う。視点変えるだけで、例えば、人形が人間に動かされて生きているみたいや、となれば、子どもたちが知ってみたいとなるのではないか。

外国籍の方の話があったが、夜間中学校ではネパール籍の方が多いが、近くに通っていても尼崎城のルーツやその横に歴史博物館があることについて全く知らない。言葉の壁は大きいので、イベントをする際に、通訳等がいることをアナウンスできれば参加しやすいのでは。

(委員)

調査対象の回収数について、3000人対象で回収率が28%は少ないかなと思った。

前回、会議で意見が出たことが資料1に入っていることが分かった。

外国人の話が出たが、先週、立花南生涯学習プラザで行われた6回シリーズの座学「やさしい日本語ボランティア講座」を受け、今週から実際にボランティアに行く予定になっている。中国・韓国籍の人は増えていないが、この10年でネパール・フィリピン籍の方が増えているので、地域で孤立しないため、地域でのボランティアが増えるよう、講座を実施しているようだ。衣食住が一番重要とのことだった。

(事務局)

補足だが、尼崎では韓国籍の方に次いでこれまで中国籍の方が多かったが、ここ数年ベトナム籍の方が増え中国籍の方と逆転した。瞬間的には、ネパール籍やバングラデシュ籍の方が急激に増えている状況があるが、これはコロナによる規制の変更により留学生などが入ってきているためと思われる。

(委員)

文化は漠然としたものなので、どう捉えるかは難しい。2つ、3つ、焦点を絞ってはどうか。

市民意識調査では、尼崎城の認知度が高い。お城でのイベントは少ないのか？

(事務局)

見学はいつでもできるが、イベントは以前に比べると少ない。

(委員)

尼崎城周辺で何かイベントが考えられないか。専門のスタッフのいる企業等に委託するなどした方がよいかと思うが、尼崎の文化発信を尼崎城を利用して進められないか。

意識調査報告の自由記述の中で、市役所の雨漏りのことが記載されているが、「文化・芸術は環境をよくしないと豊かにはなりません」とあり、同意見である。

(コーディネーター)

目玉を2つ、3つに決めて、というのは、例えば尼崎城といったものを集中的に文化的なシンボ

ルとして事業を作ってはどうか、ということか？

(委員)

そう思う。

(委員)

近松門左衛門について、私は勉強したことがない。若い世代と傾向が分かれてしまっており将来が心配。他の委員の意見にあったように活用するのはいいことだと思う。また、逆に若い世代に人気のあることを上の世代にも伝えることも大事だと思う。

また、アルカイクホールという大きな施設があるのに、伝わっていないのを残念に思う。もっと行きやすいイベントなどで活用できないか。

(コーディネーター)

アルカイクホールの活用についていかがか。

(オブザーバー)

アンケート調査がコロナ禍に実施されたこともあり、厳しい意見となった。実際に R2 年度はイベントがほぼ開催できておらず、それが反映されたと感じる。あまり敷居を高くすることなく利用促進に努めて参りたい。今年度はホール 40 周年にあたり、使用料が 40%off になるサービスを打ち出しているがなかなか申し込みが増えていない状況である。市民に利用していただくには、地域に参加し、活動を盛り上げていく中でアルカイクホールに来ていただくような仕組みが必要だと考えている。新ビジョンに合わせて財団でも実施計画を策定するので、その中で利用促進策も取り込みたい。

3 文化事業の地域展開状況等について

(コーディネーター)

では引き続き、資料3について説明を。

(事務局)

(資料説明)

- ・資料 3 文化事業の地域展開状況
- ・参考資料 令和3年度地域振興センター事業一覧

(コーディネーター)

文化事業の地域展開状況、また、地域振興センターの状況の説明を受けて、ご質問・ご意見があれば。

(委員)

文化事業の地域展開を今後増やしていくことを考えた場合、現場対応は業務過多な状況がうかがえる。高松市では、芸術士派遣という事業があり、中間支援で NPO が保育施設を中心に年間 80 件程度、登録した若手の芸術士を派遣している。尼崎でも今後、若い作家が住みやすい場所となっていくためには、そうした派遣制度等を地域展開の中に取り組みられれば、更に体験など強化されるのではないか。

「おうちでアルカイック」の展開として、学校等教育現場で動画の活用等について推進はされているか？

(オブザーバー)

アウトリーチ事業については、現在の姿が最終形とは考えておらず、最終的には文化教室の先生や旧公民館で講師をされていた方のバンク的な取り扱いを行い、紹介できる形にもっていきたい。若手芸術家の育成という視点も踏まえ、そういった登録制度を整えられるよう現在も進めているところである。

学校現場での活用については、アウトリーチ事業においても、学校により、例年応募される所と、校長会で声をかけても全く応募がないところがあり、また 40 校程度応募があったとしても実績ではキャンセル等で 30 校程度となってしまうのが現状である。教育現場にはアクションは起こしているが乗ってきていただいていない状況がある。福祉施設向け、医療現場などでのコンサート、ネグレクトの方を対象にコンサートを実施したこともある。

(委員)

今夏に A-LAB GO 事業に 2 回参加した。子どもたちはコロナ禍もあり、教えてもらう環境がなかったので、とても楽しく「次はいつ会える？」と聞かれたりした。継続して事業をしていくことはとても大事なのかなと思う。夏休みに限らず、放課後の時間や、長期休暇は親も持て余していると思うので、冬休みにもあるとよい。実際に人と会って教えてもらうことは学びになるなど思う。とてもいい時間であった。

まちの子育て広場というのに登録しているが、その派遣は子育て分野に限られてしまい一般に広げるのは難しい。例えばアーティストの方や、得意分野がある方が登録されている専門サイトがあつてそこでマッチングできれば、個人でも生涯学習プラザの大ホールを借りて子ども向けクリスマス会を企画する等でき、文化に触れる機会をつくることにも繋がるのではないか。

(コーディネーター)

アーティスト等の人材バンクを期待するということ。

(オブザーバー)

登録する講師の個人情報保護の観点もあり、文化振興財団が間に入り紹介する、という形を模索している。講師に連絡先をオープンにしてもよいか質問すると、クローズを希望されることも多く、自由にやり取りするというのは難しいところがある。

(委員)

以前、文化振興財団のアウトリーチ事業で、音楽家の派遣を見学した。音楽は、授業科目でもあり学校現場で取り組みやすいと思うが、そうした事業をぜひ演劇分野でも行って欲しい。ピッコロシアターでは、ピッコロ劇団員が 35 人所属し、中には尼崎市の市民芸術奨励賞を受賞した演出家等もいる。依頼があればワークショップなどもしている。小学生向けの「あつまれ！ピッコロひろば」プログラムもあり活用して欲しい。文化振興財団の地域展開として学校現場への事業も一緒にできたら。

(コーディネーター)

これまでもピッコロシアターと財団で連携はあった？

(オブザーバー)

尼崎演劇祭はピッコロシアターで開催しているし、近松賞の上映もピッコロシアター・ピッコロ劇団の協力をいただいております、連携している。

今年度の事業計画ではアウトリーチ事業に演劇部門も取り入れており、まだアプローチができていなかったが、近日中に調整に伺いたい。

4 改定「文化ビジョン」イメージについて(意見交換)

(コーディネーター)

メインテーマである、資料 4 について事務局より説明を。

(事務局)

(資料説明)

・資料4 改定文化ビジョンイメージ(案)

(コーディネーター)

資料 4 では 3 本柱の改定のイメージと、相関関係の説明であった。

本会議は、文化ビジョンの改定を考える会議であるが、次回 3、4 回目では絞り込んだ議論になる見込みである。本日はたたき台として作ったものに対して、自由にご意見をいただき、それを基に 3 回目の資料にしていきたい。そうした意味でも、全委員の方に意見をお願いしたい。

(委員)

私が心掛けているのは、主体的な市民の活動であり、また若い人のチャレンジが生まれるような大人の意識。大人の意識こそ文化力であり、改善していく必要があるのではないか。大人が生活の中で他に依存する傾向があるのでは。文化に親しむことによって主体的な学びがどう起こるかが気になる場所である。芸術の活動を通じて人が人として誇らしく、なりたい自分へ広げていくイメージがあり、文化にはその力があると思う。

「歴史・文化を受け継ぎ、育てる」というところに大人としての力量が必要とされている。市民意

識調査でも若い人は流行りの忍たま乱太郎・阪神タイガース・尼崎城を意識しているが、歴史・文化を受け継いでいくには歴史・文化を担ってきた大人の意識が必要とされている。

若い人の夢とチャレンジを応援する大人の側の主体的な文化活動がイメージできればと思う。それが社会の学び、学習になっていくと思う。

(コーディネーター)

若い人のチャレンジも大事だけど、大人もちゃんと元気に。芸術体験を通じて自分を再発見できるような取り組みということ。

(委員)

資料4のイメージ図の中で、「芸術活動、文化活動に関する戦略的な情報発信」というのは大変難しい課題で、現場でも日々苦勞している。市民意識調査 P23 で、「子どもの文化・芸術に触れる機会が十分か」という問いに、「不十分」「どちらかと言えば不十分」という回答が46.1%と一番多い。コロナ禍で、そういった機会が減っていることもあるだろうが、もっと体験させたい、という市民の声だと思う。ただ、前回(H28)調査では、「子どもが文化・芸術に触れる機会に満足されていますか」という問いに、「普通」「わからない」という声が圧倒的に多い、ところにショックを受けた。もっと芸術体験が増えて欲しいと思っている市民がいる一方で、特に関心がないとも受け止められるアンケート結果が出ているのではないかと思う。

そのことから、戦略的な情報発信というのがとても難しいと思う。届かないところにどうやって届けるか、芸術文化がどうやって社会の中で役に立つのか、いかに説得力を持って日頃から広げていく活動をするのか、戦略的な情報発信というものを一緒に考えていきたい。

(コーディネーター)

とても大切なことをご指摘いただいた。一緒に考えていきたい。

(委員)

資料4のイメージ図の中で、「子どもの鑑賞・創作する機会の充実」とあるが、「芸術活動の発表の場づくり」には「創作の場づくり」が入っていない。発表の場を持つためには創作する場、創作する環境がないとそこには至らない。ピッコロシアターだと劇団が練習する場所もあるが、大阪市内だと80年代に小劇場を大きいホールに変えたために練習する場所がない、オーケストラ等でもみんなで練習をする場所がないということがある。発表の場だけがあっても全員でやるオーケストラは奏ることができない。そのサポートとして空いているときには創作の場、練習の場として提供できるような、劇場でも創作の場として活用できるようなことができるとよい。学校に空き教室があるならそこでアーティストが制作する、いつもそこでお兄さんお姉さんが何かを作っており、時には美術(図工)の授業では一緒に制作をし、それを体育館で発表する、といった事例もある。いろんなところでアーティスト・イン・レジデンスをやっているが、都市の中での活動はまだ少なく、芸術活動の発表の場としてだけでなく、ぜひ制作の場づくりもここに入れていただきたい。

(コーディネーター)

教室などで、創作・制作の場をもっとたくさん作ろう、ということ。

(委員)

それに加えて、身近に制作活動をする人がいる、ということが大事だと思う。

(委員)

イメージ図については、すべて盛り込まれていいと思う。

小学校の空き教室については、園田地区は生徒数が多いと聞いているが、その他の地区では統合等もして、空き教室があるのではないかと思う。

話がずれるかもしれないが、小学生が放課後に過ごすことができるこどもクラブは、空き教室があるのに4階にあって、1年生の小さな子どもが大きなランドセルを背負って上がるのは大変だと感じていた。児童ホームは1階の別のところに行くようになっている。こどもクラブと児童ホームの管轄も違うようで、場所も違いがあった。先ほどの話を聞いていて、ふと思いついた。

(委員)

市民意識調査の結果で、「尼崎の文化の特徴」について、若い世代で「近松門左衛門」や「伝統行事」が低下とあるが、これを行政としてどう捉えるか。これまでずっと「近松」といつてやってきているが、ここにきて薄れてきているのは事実としてある。また、「社会参加・交流の観点」が低下とある。これも隣がどうしているかが自分のところだけでいいという気運。

若い世代では、今後、バリエーションがどんどん変わっていくということ。若い世代のダンス、あれもひとつの芸術だと思う。目先を変えていくというか、興味を持つものを行政が与えていくという観点も必要だと思う。オーケストラを聞く機会をつくる、ピッコロシアターで演劇を観る、等というのはぜひお願いしたいことではあるが、それにプラスして、違った観点の題材を少しずつ入れていくことも必要ではないか。端的に言うと、ダンスの選手権をオクトでやるとか。目先を変えていくことも一つのやり方かなと思う。

生涯学習プラザが各地区で立っており、きれいで便利、使い勝手もいいし料金的にも高くない。一方、アルカニックのホールの場合は50万、100万と費用がかかるので、ホールの方から一つ発信していくということも必要であると思う。

(コーディネーター)

ダンスは若者や子どもたちには関心が高い？

(委員)

小学校では体育の授業でダンスは必修である。

(委員)

改定文化ビジョンのイメージの中で、一番に歴史・文化が来ているが、市民意識調査では10～

30代では歴史・文化に関心がないという状況だった。それなのに一番にくるといのは、若い世代を無視しているなど思う。

私が音楽を始めたきっかけは、不登校で学校へ行けなかった時に音楽を聞いて励まされたことと、曲って自分でつくれるんだ、というのを知り、歌詞にしたら想いを伝えられたから。なので、音楽は不登校の子にこそ自分の想いを伝えるきっかけになるのではと思う。私自身、不登校の時にそういう場があったらよかったのにと思っている。音楽を始めるにも始め方がわからない、触り方もわからない、そういう時に知り合ってもらえたら、それは若者の夢を応援する、ということにもつながっていくと思う。触れるきっかけも大事だが、その先に進むためにもそこまで応援してくれたら若い世代も羽ばたいていけるのではないかな。

(コーディネーター)

若い人も不登校等色々な状況の中でも、文化との新しい出会いがあれば気持ちに変化したり可能性が広がる、ということ。

初めの方に発言された方で、言い忘れたことや追加でご意見があれば。

(委員)

他の委員の話聞いて、すごく具体的で切実で、それが音楽に出会って自分というものが高まっていったというのは、そういうものなのだと自分も思う。それがたまたま音楽であったり、自分の場合は神社で祭りのお囃子が聞こえてくるとソワソワしたり、その場所にいけばまた誰かと会える、というのも文化である。文化力で覆われている、そんな文化がいっぱいあるまちは、誰もがしんどい心の状況になっても前へ進んでいけるまちである。音楽だけでなく、そこにいる人も繋がっていくので、今の話は感動した。音楽、文化ってすごい。それを味わって続けていく、そこに歴史や文化はある。ここがふわふわとつながっていく、というのは市民である。市民の文化力をあげるといことになると「人」というものに着目して欲しい。行政の制度ができた、ということだけが評価対象になるのではなく、市民の幸せにつながるような生活が求められていくと思う。そのために大人も学んでいかなければ、と思う。

(委員)

ピッコロシアターは演劇のホールに特化しているが、現在どんな活動をしているのか。子どもが来ないということだが、何か取り組みをされているのか？

(委員)

年間ラインナップを持ってきており、ご覧ください。開館44年になる大ホール396席という劇場で、演劇学校・舞台技術学校と県立のピッコロ劇団を持ち、主に劇団のホームグラウンドとして使っている。ただ貸館率が非常に高い劇場であり、普段、週末は地域のバレエスクール、ピアノの発表会、中学校の吹奏楽部の定期演奏会、高校演劇のコンクール、尼崎市演劇祭等も行っている。自主事業と貸館事業のバランスをせめぎ合っている状態である。

中ホールは多目的ホールで、リハーサルなどにも使用でき、小ホールが室内楽に適したホールと

なっている。演劇が中心と言っているが、貸館事業では音楽比率が高く、小ぶりなホールなので、市民もアマチュアの方が使いやすいと思う。会場費もリーズナブルであり大ホールで 1 日貸し切って8万程度、小ホールでピアノをつけて1万5千円程で発表会が可能。

文化庁からの助成金も得てアウトリーチ事業も積極的に行っている。

(委員)

では稼働率は高い？

(委員)

稼働率は、コロナ禍で少し落ちてはいるが、それがなければ各ホール 90%以上である。ピッコロ劇団公演が中学生のための「わくわくステージ」を平日にやって活用したり、40 年近く演劇学校・舞台美術学校もやっているのので、平日夜間はその学校の授業として劇場を活用している。夕方になると仕事や学校を終えた学生が集まり、裏方の勉強や演技を学んでいる。そうしたことも稼働率を押し上げる要因である。80~90 人が通い 1 年間のカリキュラムを終え地域へ出て行くという仕組みになっている。

(委員)

多彩で、内容が濃いものをされているので、行政とタッグを組んで子どもたちに年に一回は機会を作るとか、まったく知らない子どもたちにもきっかけを与えられるのではないかと思い、質問した。

(コーディネーター)

稽古場でも実施しているのか？

(委員)

演劇学校・舞台美術学校は劇場で実施しており、ピッコロシアターの別棟の稽古場では行っていない。

(コーディネーター)

年間 80~90 名の卒業生の進路は？

(委員)

2~3 年通われる方の中には、プロの俳優になったり、プロの舞台技術者や照明会社へ就職していく者もいる。元々は地域の文化リーダーを育成しようという趣旨なので、阪神間の高校演劇の顧問の先生も多く卒業しており、この地域の演劇の水準は高い。去年の高校演劇阪神大会から出場した伊丹北高校は全国大会でも優秀賞を受賞した。それもピッコロ演劇学校の卒業生が顧問として指導している。その他、例えば、地域の文化施設・生涯学習施設の設備で音響等を使い地域活動に役立てたいとピッコロ舞台技術学校に入学して来られる方もいる。

(コーディネーター)

一通り委員の皆さんのご意見をいただいたので、記録を起こして今後のビジョンの中身に活用していただきたい。

アドバイザーの感想などあれば。

(アドバイザー)

11年前に尼崎市の顧問となり、当時ピッコロシアターの運営委員をしたり、総合文化センターの白髪一雄さんの事業展開にも関わった。白髪さんは高校の先生をして、ついこの間まで尼崎に住んでいたという状況だった。絵を描こうと思うと普通、人はペンを持つのに足で描いた人がある、これは単に絵の話だけじゃなく、足で絵を描いた瞬間に世界とつながっている、その瞬間を子どもたちに感じて欲しい、何年かかけて全ての学校でやれるようになったらいいよね、と当時考えていた。まちの中にある資産をどう経験してもらおうかがとても大事で、何人かに一人くらいはその記憶があればいずれそういう道にいったらいいな、と期待を込めて当時つくった事業が出てきて嬉しく思う。

尼崎の文化の特徴、といった話も出てきたが、先日、甲子園の沖縄県代表校の応援は市尼の吹奏楽がしている、という話題があり、これも文化というか尼崎と沖縄の関係性の話であったり、高校生の活動の話、尼崎は吹奏楽が盛ん、という風にいろんな話がつながってくる。そんなエピソードというかちょっとしたことを集めていくのは実は意味があることだと思う。

あと、自治のまちづくりでも、生涯学習プラザに公民館や地域センターを重ねていく、これは善見委員にお話いただいた、社会教育、大人の学びと子どもの育ちをどうつなげていくかというのはこのまちの営みに重要なポイントになってくると思っている。今日みなさんの話でも教育現場や学校で使っていただきたい、等という話もあり、つながってくる。

もう一つ感じたのは、文化というと自分が表現する、という話に行きがちだが、その話の裏で文化的包摂というか、そういう状況があるからこそ、受け取る側の変化や気づきという話が実はすごく大事で、表現することも大事だが受け取る側にもいろいろなものが生まれる、という関係性の話が、特に行政が行うような文化的な視点というのは、パフォーマンス視点だけでない形で表現されることがすごく意味があるんだろうなと思った。改めてそういうことが必要な時代でもあるし意味があると感じた。

(コーディネーター)

今日は色々な前向きな意見をありがとうございました。いただいた意見少し取りまとめたものを次回にビジョンイメージを具体化するために反映をしていくよう、作業を進めたい。

三本柱について、基本的には異論はないが、若い人の夢とチャレンジを応援する、というのは前回ビジョンから取り組んでおり、とても大事だと思うが、若い人だけでなく高齢社会でもあるので、50代60代から大変な創作能力を発揮する人も増えているので、多世代にわたりそれぞれが輝けるような尼崎市になる、というのが大事かなと思う。その辺に工夫がいるかなと思った。

本日いただいた意見で、やはり体験することで、ものの見方が変わったり新しいものに出会ったりするので、体験する機会をつくることは大事だなと感じた。アドバイザーの話にもあったがいろ

んな場所でいろんなことに会うことが大事で、文化的なことについてどこでも出会える尼崎、というのがいいのではないか、という感想を持った。

最後にこれだけは一言だけ言いたい、等あれば。

(委員)

「「ありたいまち」に向けた施策間連携ガイドブック」が配られたが、説明は。

(事務局)

説明が抜けており失礼した。「「ありたいまち」に向けた施策間連携ガイドブック」は、尼崎市全体の計画である総合計画の中で、文化だけでなくそれぞれの施策がどのように関係しているか、また市の全体の総合評価がどのようなことになっているか、等まとめている資料である。特段説明する資料ではないが、市全体がどのような動きをしているか、市全体がどのようなまちづくりを目指しているか、参考までにご覧いただけたらと思う。

(委員)

これは今年度版か？

(事務局)

今年度版で、いわゆるまちの通信簿であり、全体の目標がどの程度達成されているかを評価するものである。

(委員)

市民はみんな持っているもの？

(事務局)

P8 から P12 にある各計画の関連の付属機関、会議体の委員にお配りし、それぞれこういう位置づけでご審議頂いているということを確認していただきたいという思いで配布している。

(コーディネーター)

事務局から、本日聞いたことで何かご意見等あれば。

(事務局)

もともと6年前に作った尼崎市の文化ビジョンが、今回大きな変更なくいけるのではないかとということでそれを基に作っていったが、日本全体の方向性で文化を活用して観光を進めていこうという話もあるので、次回以降そういった視点がいるかどうかの議論もできたらと思う。

(コーディネーター)

それでは以上で事務局にお返りする。

(事務局)

貴重なご意見をありがとうございました。頂いたご意見は取りまとめて議事録の形で共有すると共に、次回示す資料の中でそれを反映させ、ご説明させていただけたらと思う。